

明治期における学生男色イメージの変容

——女学生の登場に注目して——

前川 直哉

1. はじめに

明治期の男子学生の中に「男色」が流行していたことは、広く知られている。坪内逍遙『当世書生気質』や森鷗外『キタ・セクスアリス』など、作品中に男子学生同士の男色が描かれている文学作品も少なくない。また1900年前後に『万朝報』や『教育時論』などジャーナリズムをにぎわせた「学生風紀問題」においても、男子学生たちの男色は大きく取り上げられた(古川 1994, 渋谷 1999)。

古川(1994)や氏家(1995)など従来の研究は、これら明治期の男子学生の男色を、江戸期など前近代における武士階級の男色の継続として取り扱ってきた。例えば古川(1994)は、男色を賛美する価値観(古川の用語では「男色コード」)が「近代以降も継続して存在していた」(p. 30)と記した上で、「明治維新によって武士階級は消滅したのであるが、その男色文化は旧制の中学校や高等学校を中心とする学生文化の中に受け継がれていった」(p. 31)と述べている。だが、それならばなぜ学生文化の中にのみ男色文化が受け継がれたのか、という問いはここには立てられていない。

明治期の男子学生同士の男色に関して、こうした従来の研究とは異なる視点を提示したのが、G. フルーグフェルダールの研究である。フルーグフェルダールは明治期の一般的な言説において、男性同士のセクシュアリティ(男色)は「野蛮な」「不道徳な」あるいは「言葉にするのはばかられる」といった表現がされるようになったことを明らかにし、明治期を通じて男色が「過去の日本」「薩摩などの西南日本」そ

して「青年の世界」という3つの方向へ封じ込められたことを指摘している。そしてこのような男色の周縁化 (marginalization) は、男色を「文明化された」社会から切り離す方向に作用することとなったと、フルーグフェルダーは主張する (Pflugfelder 1999, pp. 193-194, p. 203)。

後述するように、明治期の知識人層において男性同士の性行為を排除する価値観が存在していたことを考えるならば、上のようなフルーグフェルダーの主張には説得力があると思われる。とりわけ、明治期における男色一般と男子学生同士の男色とを、明確に区別した上で考察するという視点には、学ぶべき点が多いと言えよう。本稿では男性同士の肉体的・精神的に親密な関係のことを「男色」と呼ぶこととするが、特に中学生・高等学校生など男子学生同士の男色については「学生男色」という独自の呼称を用い、男色一般と明確に区別した上で考察していく。

教育社会学および教育史の分野においてこの学生男色を取り上げた先行研究としては、中村 (2006) が挙げられる。中村は「男女交際」の前段階としての学生男色に注目し、本稿と同様、坪内逍遙や森鷗外の文学作品に描かれる男色や、明治期に流行した男色小説『賤のおだまき』を取り上げている。だが、中村の分析は「硬派＝男色／軟派＝女色」という『当世書生気質』や『キタ・セクスアリス』などの文学作品中に描かれる二分法をそのまま使用することとどまってしまっており、後述するような「軟派」を自称する男子学生たちの間で「男たちの恋」が流行する状況を説明することができないなど、不十分な点が多い。中村の研究は「男女交際」と対置する形で学生男色について記述した結果、学生男色のイメージを一面的にとらえてしまっており、学生男色の表象やイメージそのものが時代によって変容していることへの考察が不足していたと言えよう。このような考察の不足は他の先行研究にも共通しており、例えば先述のフルーグフェルダーの研究においても、1880年代に記された『当世書生気質』内の記述と1900年代の新聞・雑誌上の言説を同列に並べて論ずるなど、学生男色の表象に関する歴史的変容への配慮不足が見られる。

本稿の課題は、明治期の言説や文学作品、あるいは当時を回顧した自叙伝などの分析を通じて、明治期における学生男色のイメージや表象の変容を検証し、男子学生を取り巻くどのような状況の変化がこれらの変容の背景にあるのかを考察することである。明治期日本における学生文化の一つとも言える学生男色のイメージについて調査し、それらが歴史的に変容していることを明らかにした上で、その変容の背景を実証的に考察することは、教育社会学や教育史の分野はもちろん、ジェンダー・セクシュアリティ研究においても重要な意義を有すると考えられる。

明治期における学生男色イメージの変容

また本稿では、このような学生男色イメージに関する歴史的な変容を考察する際、当時の男色や学生男色に関する言説ばかりではなく、それらを排除したり衰退させたりする動きの側、すなわちヘテロセクシズム（異性愛主義）がどのように展開したのかという点に注目している。本稿では特に、男子学生とヘテロセクシズムとの関係を考察する上で非常に重要と思われる「女学生の登場」や「恋愛概念の変化」などに着目し、これらが当時の男子学生に関する言説や学生男色イメージにどのような変容をもたらしたのかを検証することとする。これらの視点もまた、古川や中村、フルーグフェルダーなど、従来の研究には見られないものである。

2. ファンタジーとしての学生男色とその限界

明治初期の日本には、男性間の性行為を刑事処罰の対象とする法令が存在した。1872年に司法省によって立案された「鶏姦条例」と、翌1873年に布告・施行された改定律例の第266条、いわゆる「鶏姦規定」である。改定律例第266条において男性同士の肛門性交（鶏姦）は、合意の上であっても能動者・受動者とも90日の懲役刑とされた。この鶏姦規定は、刑法典の旧刑法への移行に伴い1882年に廃止されたが⁽¹⁾、その後も刑法の注釈書において鶏姦を「人倫ニ戻ルノ甚キモノ」「其害最モ大」として糾弾し、「鶏姦」に関しては特別の規定を設けて厳罰に処すべきであるという主張が述べられるなど、明治期の知識人層においては依然として、男性同士の性行為を排除し、禁止する価値観が存在していた（堀田 1883, p. 350）。

一方、このような知識人層の価値観に反し、当時の男子学生の一部は、男色を肯定的に評価する価値観を共有していた。坪内逍遙によって1885年から翌1886年にかけて刊行された『当世書生気質』には、女色を徹底的に避け、龍陽主義（男色）を肯定的に評価する「頑固党」の書生が登場する（坪内 1969）。また森鷗外の『キタ・セクスアリス』は、「性欲的に観察して見ると、その頃の生徒仲間には軟派と硬派とがあつた」と記した後、春画を見たり、根津・吉原・品川などの悪所通いを行ったりする軟派と、男色を愛好する硬派とを対置し、数の上では軟派が優勢ながらも「硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護うしろめたい処があるやうに見えてゐた」と続くのである（森 1972, pp. 113-114）⁽²⁾。

ここで『当世書生気質』と『キタ・セクスアリス』の両方に登場する、ある一冊の本に注目してみよう。それは「平田三五郎物語」の通称で知られる小説『賤のおだまき』で、慶長期（16世紀末）の薩摩を舞台に、美少年・平田三五郎と年長者・吉田大蔵という二人の武士の男色を描いた作者不明の作品である。そして「硬派」

がこの小説の写本を「引張り合つて読む」(森 1972, p. 114) という『キタ・セクスアリス』内の記述が大袈裟とは思えないほど、この作品は明治期の書生・学生たちの間で多くの読者を獲得していた。当初は写本で伝えられていた『賤のおだまき』は、1884年には自由党系の小新聞『自由燈』に連載され好評を博し、その後も複数の版元から版本として出版されたのであった(前田 1989)。その他、同じ平田三五郎らを題材とした山田美妙『新体詩華 少年姿』(1886年)や、1891年雑誌『都の花』57号に掲載された、やはり薩摩武士の男色を題材とした天囚居士(西村天囚)の小説「薩摩心中」など、この時期には男色を肯定的に扱う文学作品が複数作成された。こうした男色文学の流行からも、明治期の一部の男子学生の間で男色が肯定的な評価を受けていたことが窺われる。

では、この時期に男色を肯定的に支持していた男子学生たちは、男色に対してどのようなイメージを抱いていたのであろうか。ここでまず参考になるのは、『自由燈』への『賤のおだまき』の連載開始にあたり掲載された「在東京 同窓学友連」署名付きの断り書きである。この断り書きは、男色を「造化自然に悖戻したる行事」「開明の道学固よりこれを取らず、法律亦た禁ずる所」と記し、男色は排除し禁止すべき行為であるという留保をつけながらも、「義を重んじ気を尚び、生死渝らず相誓ふて文武を奨励し力を国家に尽すが如き」と、男色の積極的効用を認めているのである(『自由燈』1884年7月19日、3-4面)。このように、男色を「文武の奨励」や「国家への尽力」と結びつける発想は、『当世書生気質』に登場する「頑固党」の人物・桐山の、「女色に溺るゝよりハ龍〇(陽か?)に溺るゝはうがまだえいわい。第一互に智力を交換することも出来るしなア。且ハ将来の予想を語りあふて。アムビション〔大志〕を養成するといふ利益もあるから」という台詞を想起させる(坪内 1969, pp. 103-104)。ここで桐山は、「女色に溺れるよりは、男色(龍陽)に溺れるほうがまだマシである」という認識を示し、男女間では「智力の交換」や「大志の養成」が不可能であるという前提のもと、それらが可能な男性同士の関係を、男女間の関係よりも優れていると主張しているのである。当時、男色を支持していた男子学生の多くが、このように互いの成長や大志の養成を期待できる関係として、男性同士の関係を男女間の関係よりも高く評価していたと考えられる。こうした認識は、明治期の男子学生たちのエリート意識とも合致したに違いない。

明治期に、実態としてどのような学生男色が存在したかは、不明な部分が多い。ただ確実に言えるのは、一部の学生の中に、女色を遠ざけ、「智力の交換」「大志の養成」といった成長が期待できる男色関係、対等な男性同士の親密な関係性として

明治期における学生男色イメージの変容

の男色を理想視するという一種のファンタジーが共有されていたようだ、ということである。ここでファンタジーという語を使ったのは、このイメージにはある限界が伴っていたからである。その限界は、ここで共有されている理想的な関係が、小説などの文学作品という虚構の中でのみ成立しているという点にあった。

『賤のおだまき』と「薩摩心中」という二つの男色小説には、女性が小説中に一切登場せず、そして主人公二人が男色関係を保ったまま、若くして死んでしまうという、設定上の共通点が存在する。これらの共通点は、理想的な男色関係があくまで小説の中で作り上げられた虚構であったということを示している。二人がそのまま成長していたら関係はどうなったのか、妻帯はしなかったのか、女性が登場したらどうなっていたのか、そうした問いはこの小説中では一切問われることがない。『賤のおだまき』の二人は同じ合戦中に相次いで討ち死にすることで、「薩摩心中」の二人は武士の名誉を守るために心中することで、理想的な男色関係というファンタジーは維持されているのである。ここに、硬派学生理想としての男色イメージの、大きな限界が存在していた。中村（2006）は「天下国家を左右する武士道を中心に据えた男色小説」（p. 50）としてこの『賤のおだまき』を紹介しているものの、硬派学生たちの描く理想的な学生男色イメージがこれらの小説の持つ虚構性に依存していることを指摘できていない点で、不十分な考察にとどまってしまっている。

一部の男子学生を魅了した、互いの成長が期待できる理想的な関係としての学生男色というファンタジー。この学生男色のイメージを大きく変容させたのは、1900年代における「女学生の登場」という新たな事態であった。次章では一旦学生男色の世界を離れ、女学生の登場が男子学生にどのような影響を与えたかを見てみよう。

3. 女学生の登場

3.1. 女学生の登場と「男女学生交際論」

1899年の高等女学校令公布を契機として、20世紀に入ると高等女学校の学校数・生徒数は急激に増加した。高等女学校の生徒数は、中学校生徒数の増加を猛追するような形で増え続け、その差を縮めていったのである。例えば高等女学校令公布の1899年に8,857人だった高等女学校生徒数は、1909年には51,781人、1919年には103,498人と急増している（文部省 1972）。このような生徒数の増加は、人びとの間に「女学生」という存在を強く印象付けたことであろう。本田和子は、「女学生」の誕生——単なる「女子」の「学生」であることを超えた、独特の陰影に限どられた「女学生なるもの」の誕生——を、明治30年代としているが、まさにこの時期、より正

表1 1906年の『中学世界』に掲載された、男女関係をテーマにした主な記事・評論

記事の掲載号、筆者、タイトル（★印は巻頭評論）	
2月号 高柴女史「新女性より見たる男学生」	5月号 正岡芸陽「男女学生と恋愛」
3月号★長谷川天溪「評論 青年の病弊」	6月号 糸左近「生理上より見たる青年男女交際論」
3月号★大町桂月「評論 遮莫家郷憶遠征」	7月号★大町桂月「評論 慈悲と恋愛」
3月号 巖谷小波「青年男女交際私見」	11月号★大町桂月「評論 男性と女性」
増刊号 水車生「時代学生気質」	11月号 河上清「米国青年男女交際の真相」
増刊号 無署名「男女学生交際問題」	11月号 高橋少太郎「青年煩悶の病理観」
5月号★長谷川天溪「評論 青年病」	12月号★大町桂月「評論 泣く子は育つ」

確には1900年代は、女学生が社会から存在を認識され、大きな注目を浴びながら急激にその数を増加させた時期であった（本田 1990）。

女学生の急増という新たな事態は、男子学生の世界にも大きな変化をもたらすこととなる。それは男子学生の「男女交際」の相手役として、新たに女学生を想定することができるようになった、という変化であった。例えば1905年9月号から翌1906年8月号にかけての1年間、『中央公論』は毎月1～5名の識者による「男女学生交際論」を掲載している。『中央公論』は三宅雪嶺・安部磯雄・下田歌子・海老名弾正・浮田和民・成瀬仁蔵・井上哲次郎といった錚々たる顔ぶれの意見を掲載し、この新たな「問題」を大きく扱ったのであった。

『中央公論』誌上での男女学生交際問題が活発化した1906年、博文館の月刊誌『中学世界』誌上においても、それまでほとんど掲載されなかった「男女交際」や「恋愛」など、男女関係をテーマとした記事や評論が噴出した。表1はこの年『中学世界』に掲載された、男女関係をテーマにした主な記事・評論の一覧である。この件数は前後の年と比べても飛び抜けて多く、1906年は男女関係に関する記事・評論が『中学世界』誌上に最も頻繁に登場した年であった。そしてこれらの記事に登場する「男女」とは、『中央公論』同様、「男女学生」を指していた。『中学世界』は、主な読者層である中学生など男子学生と、この時期急増する女学生との関係についての記事を、単独で、または他のテーマと関連させて、くり返し報道したのである。

3.2. 「恋愛」概念の変質

ここに挙げた『中学世界』誌上の男女関係記事で、主要なテーマの一つとしてたびたび取り上げられたのが「恋愛」であった。だがここで「恋愛」を扱った各記事を分析すると、この「恋愛」という言葉にこめられたニュアンスが、記事により大

明治期における学生男色イメージの変容

きく異なることに気づく。例えば高柴女史の記事「新女性より見たる男学生」では「肉欲は莊嚴なる恋愛の情緒に触れて即座に畏縮して了ひます。此に至りて、愛は始めて神聖となりそして人生の生命となるのでありますまいか」というように、恋愛の神秘性を強調している（高柴 1906, p. 27）。このような「恋愛」の用法は、1892年に北村透谷が一躍その名を轟かせた「厭世詩家と女性」において、「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」と高らかに宣言したころのニュアンスを色濃く留めていると言える（北村 1892, p. 4）。

一方『中学世界』記事中には、同じ「恋愛」の語が、高柴のような（つまり透谷のような）情熱的で神秘性を付与された「恋愛」概念とは明らかに異なるニュアンスで用いられているケースも少なくない。正岡芸陽は「男女学生と恋愛」という記事で、「恋愛と云ふ事は言ふまでもない人間の至情である」「男として女を愛しない者はない。女として又男を愛しない者もない」と述べた上で、「此に一人の女子があつて妙齡に達して自ら男子を恋したとした場合に、若し其男が完全な男で、少しも申分の無いものであつたならば、其男と結婚することは勿論宜いことであるが」などと記している（正岡 1906, pp. 111-112）。ここで用いられる「恋愛」は、先述のような情熱的・神秘的な概念とは異なり、「結婚」へとすんなり直結する、非常に現実的な行為の一つとなっているのである⁽³⁾。

菅野聡美が北村透谷の恋愛観の特徴を「恋愛の反社会性への着目」と「恋愛と結婚の断絶」の二点に集約しているように、透谷らが唱えた情熱的で神秘性を付与された「恋愛」概念は若年エリート層を中心に大きな衝撃を与えたものの、それは決して多くの人々が現実的に実行できる概念ではなかった（菅野 2001, p. 58）。そして加藤秀一が「『恋愛』と『結婚』の矛盾は飼いならされ、『実世界』の一部として組みこまれていった」と述べるとおり、次第に「恋愛」は結婚へとスムーズに接続する概念として、言わば無害化された「恋愛」へと馴致されていく（加藤 2004, p. 48）。実際、この時期は「恋愛」や「恋情」といった言葉が、結婚へとすんなり接続する概念として使われることが多くなった時期であった。前述した『中央公論』の「男女学生交際論」の中でも、安部磯雄や浮田和民のように、「恋愛」「恋情」といった言葉を、結婚と直結する概念として用いているケースが少なくない（安部 1905, 浮田 1906）。

このように、結婚に接続する新たな「恋愛」概念が普及したという変化には、男子学生の交際相手や恋愛対象として、それまでの芸娼妓や遊郭の女性などに代わり、学校による教育を受けた女学生が想定されるようになったことも深く関連している

であろう。例えば『当世書生気質』においては、主人公・小町田の恋愛相手が芸妓であることから、この恋愛を結婚へと結びつけるべきか、登場人物の間でたびたび論争が繰り広げられ、芸妓との結婚に否定的な意見も少なくなかった（坪内 1969）。それに対し、男子学生と女学生との間の「恋愛」は、結婚へと直結しうるもの、いやむしろ浮田和民が「若し其間に真個の恋愛発生することあらば偕老同穴の夫婦となるべく」（浮田 1906, p. 3）と言うように、結婚へと直結すべきものであった。

そしてこのような女学生の登場や「恋愛」概念の変化は、男子学生たちに、新たな幸福イメージをもたらすこととなったのである。

3.3. 「恋愛—結婚—家庭」という幸福イメージ

再び『中学世界』の記事に戻ろう。『中学世界』の巻頭評論を数多く担当し、硬派のイデオログとして人気を博した大町桂月は、「近時、青年の士が、スキー、ホームなどゝて、千里の志をよそに、和楽なる家庭を夢みるもの少なからず、これ青年の意気を銷沈せるを証するもの也。和楽なる家庭は、実に男子に取りては、鳩毒也」[「学業未だ終らず、学業終りても、まだ修養の足らざる人が、生意気にも、早く、ほれたの、はれたのと騒ぎ、婦女子の憐みを博せむとつとめ、和楽なる家庭を作らむとあせるは、何たる、たは事ぞや」と嘆いた（大町 1906a, pp. 6-7）。男子学生たちが恋愛への憧憬の先に、結婚と「幸福な家庭」イメージを描いていることを憂えたのである。同様の嘆きは、桂月と親しかった文筆家・田岡嶺雲が自ら編集する雑誌『天鼓』に掲載した巻頭評論などにも見られる（田岡 1905, p. 4）。

ここで記される「スキー、ホーム」や「和楽なる家庭」こそ、巖本善治ら知識人によって唱導され、その後雑誌ジャーナリズムや家庭教育論、あるいは通俗的家庭小説などを通じて普及・浸透した、従来の家族とは異なる新しい家族としての「家庭」像であった。巖本はすでに1888年、『女学雑誌』の連載社説「日本の家族」において、家族内の和楽団欒こそが「幸福な家族」に必要不可欠なものであることをくり返し強調していた（巖本 1888a）。そして巖本は、「そも〜一家の根本は夫婦に在り、夫婦相思の愛は即ち一家和楽の大根底たるなり」という一文に象徴されるように、この和楽なる家族を形成するために最も不可欠な要素として、何よりも夫婦間の愛情を重要視したのであった（巖本 1888b, p. 1）。

山本(1991)は明治期ジャーナリズムにおける家庭論の検討をもとに、「一家団欒」像がすでに1896年頃から1901年頃の間に関結し、都市中産階級の家族に理想とされ

明治期における学生男色イメージの変容

ていたと分析している。そして男子学生にとって、以前は「家庭」は言説上の理想像でしかなかったが、恋愛対象、あるいは将来の結婚相手と想定しうる「女学生」の登場という新たな状況を迎え、事態は一変する。桂月らが記すとおり、この時期の男子学生は女学生の存在を通じて、将来の「スキー、ホーム」を夢見ることが可能となった。つまり女学生の登場によって、「家庭」は男子学生にとってもある程度現実的な幸福の姿として、より身近にイメージできる存在になったのである。

こうした変化と、先述の「恋愛」と「結婚」の結合とを合わせて考えれば、次のようなことが言えるだろう。すなわち、女学生の登場を受けて、当時の一部の男子学生たちの中には、「恋愛－結婚－家庭」と直結する、一体化した幸福イメージが共有されるようになっていった。ここでの「恋愛」はもはや「人世の秘鑰」ではなくなっているが、反社会的なエネルギーをも持ちうる激情としての恋愛の魅力に代わり、一生続く穏やかで暖かい幸福を約束する（と思われる）新たな恋愛の魅力が、男子学生の前に出現したのである。

4. 学生男色イメージの変容

4.1. 軟派学生と「男同士の恋」

以上のような「恋愛」と結婚の結合、あるいは「恋愛－結婚－家庭」という幸福イメージの形成が、学生男色のイメージに与えた影響は大きかった。本章では3章のような変化が、学生男色イメージをどのように変容させたのかを見ていこう。

女学生が登場した1900年代から、学生男色のイメージには大きな変化が訪れていた。この時期に特徴的なのは、学生男色が「男同士の恋」「同性の恋」などとも表現されるようになり、学生男色が硬派学生の占有物だとは認識されなくなってきたことである。それは「硬派／軟派」というカテゴリーが、それまでとは異なる基準で切り分けられることを意味していた。例えば里見弴（1888年生まれ）は自身のことを「軟派」であったと振り返っているが（里見 1983, p. 31）、自伝的小説「君と私と」において「何しろその頃は一般学生の中に男同士の恋がヒドク流行つても居たし、私もそれに浮身をやつして居た。近頃その時分の日記を披いて見て驚いた位あらゆる頁に同性に対する恋情が訴へられて居る」と記している（里見 1973, p. 211）。同様に、自らを学生時代「軟派に属して」いたとする俳人の富安風生（1885年生まれ）も、自叙伝の中で「可憐な少年を見立てて、ひそかに長いラブレターをかいたりした」中学生時代を振り返っているのである（富安 1983, p. 28）。

このように文学少年たちが同級生や年下の少年に恋心を抱いたという話は、例え

ば太宰治など後の時代にも引き継がれる(太宰 1947)。ここにはもはや、「男色＝硬派」という認識はない。そして時代は下るが、1920(大正9)年に旧制府立二中に入学、寄宿舎に入った人物の回想には、「女人禁制の組織である。欠礼したとかにやけているとかで下級生に鉄剣制裁する硬派もあれば、チゴさん(一種の淡い男色)を作る軟派もある」というような記述が見られるのである(平岩 1971, p. 67)。

ここに至り、男色はもはや硬派ではなく軟派が行うこととされ、認識が180度逆転している。このような用語・認識については地域差や学校差もあるであろうが、古川(1994)や中村(2006)など多くの研究で疑われてこなかった「男色＝硬派」という単純な構図は、改められなければならない。上記の回想からは、従来のような「硬派＝男色／軟派＝女色」という二分法ではなく、「硬派＝下級生に鉄拳制裁／軟派＝下級生と淡い男色」というように、分類の方法が変化していることが分かる。

こうした認識の変化の背景にあると考えられるのは、恋愛対象としての女学生の登場により、男子学生にとって「恋」「恋愛」がより身近な概念となり、同時に「恋」「恋愛」への憧れが増したことである。その結果、「男子学生同士の親密な関係」もまた「恋」「恋愛」と認識されるようになり、「男女間の恋の代替物」のように認識されつつ、「恋」「恋愛」に憧れる男子学生(すなわち「軟派学生」)の間に受け入れられていったのではないだろうか。

本稿の2章に見たように、当初硬派学生たちに支持された学生男色は、「女色」との比較において「智力の交換」や「大志の養成」といった成長が期待できる関係として、その肯定的イメージを保持していた。だが、軟派学生による「男同士の恋」は、男女間の恋に比べて特別何かが優れていると考えられていたわけではない。それは言わば「男女間の恋愛の代替物」として、女学生よりは身近な男子学生との間で結ばれた関係に過ぎなかった。例えば太宰の自伝的小説では、15, 6歳のころ「同じクラスのいろの黒い小さな生徒」と「隣の家の痩せた女学生」との二人に同時に恋心を抱いていた様子が描かれている(太宰 1947, pp. 51-52)。このように「男同士の恋」と「女学生との恋」が同時進行で行われるという描写は、「男同士の恋」がかつての硬派たちの学生男色とは異なり、女学生との恋と比べて特権的な地位を占めていたわけではないということを示していると言えよう。

そしてこのように男子学生の間で、男同士の「恋愛」が流行したとしても、その「恋愛」は結婚や家庭の形成と結びつかない以上、「まがい物」と認識されるのみであった。「恋愛」概念がその登場当初のように、反社会的なエネルギーを強く有し、結婚など現実の制度と断絶したものとされているならば、男性同士の恋愛こそを「結

明治期における学生男色イメージの変容

婚に回収されないからこそ、より真実の恋愛だ」などと特権化することも可能である。だが、この段階で「恋愛」はすでに、将来の結婚へとスムーズに接続する概念に変質しつつあった。そして「恋愛」が結婚や家庭の形成と結びつくことによって初めて、男女間の「恋愛」には同性間の「恋愛」とは異なる大きな特権が付与されることとなったのである。「結婚」を後ろ盾とする異性間の「恋愛」が、同性間の「恋愛」にない正統性を獲得していく過程は、言わばヘテロセクシズムの制度化とも言うべき現象であった。このように制度化されるヘテロセクシズムにより、同性間の恋愛は「まがい物」として周縁化されていったのである。

また、男子学生による異性との交流としてイメージされるものが、それまでの芸妓や遊郭の女性との交流から女学生との交際・恋愛へと、大きくシフトしていったことも重要である。このうち前者との交流は学生の「墮落」として表象され、男子学生にとって負の要素をもたらす行為であるという認識が社会的にも学生自身にも広く共有されていた。そして『当世書生気質』などでは、こうした「墮落」としての男女関係すなわち「女色」に対抗する形で、学生男色が自己正当化されていたのであった。だが後者、すなわち男子学生と女学生の交際・恋愛は、後の結婚・家庭の形成へと結びついていく関係であり、一概に「墮落」として批判されるべきものではないと捉えられるようになっていた。いわば男子学生の異性愛の相手として相応しい女学生という実体が登場したことで、ヘテロセクシズムは男子学生の世界においてもより広範な影響力を持ちうるようになったのである。実際『中央公論』や『中学世界』誌上においても、こうした女学生との交際や恋愛については、肯定的に評価する意見も少なからず登場している。そしてここで従来の「学生男色」が、この新しい男女交際へのアンチテーゼとして持ち出されることは、もはやなかった。

「学生男色」が、男子学生と女学生の男女交際へのアンチテーゼになりえなかったことを、1909年に起こった文相・小松原英太郎の男色擁護発言騒動に見てみよう。1909年1月、小松原文相が夏目漱石・森鷗外・巖谷小波ら9名の文学者を招いて行った「文士招待会」において、談話中に学生の男色に関して「佐賀県では非常に流行して居る、海老茶（引用者注：女学生のこと）を追ふのと少年の尻を追ふのと何方が好いかと云ふに少年を追ふ方が何処か士気を鼓吹するやうで好いやうだ」（『読売新聞』1909年1月20日号、3面）などと文相が発言したとする記事が、一部の新聞等で報道された。巖谷小波によれば、実際には男色の話題を出したのは小波で、文相はその話題を聞いて笑っていただけであったが、「当時多くの新聞は、さもさも文相が男色家であり、乃至は之を奨励する者であるやうに伝へ、それをまた軽信し

て、直ちに文相の人格を論じた者もあつた」という（巖谷 1909, p. 75）。

実際に雑誌『太陽』は、この話題に対して「未曾有の珍聞」「国民の面汚し」などの語句を用いた上で、「一国の文相たる人が、不自然極る男色に対して、幾分かの賛成的態度を示したなど評判されては、国民全体の品位が下落する」という厳しい論評を掲載した（長谷川 1909, pp. 156-157）。ここに見られるとおり、「女学生との恋愛よりも男子学生同士の男色の方がマシ」とする主張は、すでに社会的な賛同を得られる主張ではなかったのである。

4.2. 硬派学生と「男の友情」

前節では女学生が急増した1900年代に、男子学生同士の親密な関係が「男同士の恋」「同性の恋」などと表現されるようになり、「恋」「恋愛」に憧れる男子学生、すなわち「軟派学生」の間に受け入れられていったことを見てきた。では、硬派学生たちの「男子学生同士の親密な関係」は何と表現されたのか。本節ではこのことについて、当時『中学世界』の中心的な執筆者であり、硬派学生のイデオログであった大町桂月の言説を追いながら考察しよう。

桂月は1900年代の学生向け雑誌や自身の著した修養書で、たびたび恋愛をテーマとして取り上げ、男子学生が恋愛に没頭することを戒めていた。その理由の一つは、「大切な時機を、恋愛に妨げらるゝは、先覚者の傍観するに忍びざる所也」という、青年期に恋愛は不要であるという主張である（大町 1908, pp. 13-14）。

だが、桂月が男子学生の恋愛を否定的に論じた理由は、それだけではなかった。それ以上に桂月が強調したのは、「恋愛は、女子の全体也。男子にありては、一部分たるに過ぎざる也」「恋愛は、自然の性情也。然れども、恋愛を全部として全力を注いで、女子と取つ組合を為すは、これ男子の天職を忘れたる也。人間の何たるかを解せざる也」といった文章で表現されるような、恋愛が「男らしくない」という主張であった（大町 1908, pp. 10-11）。

「男は力、女は愛」という、桂月がくり返し用いるフレーズで表されるこうした恋愛観は、「恋愛」が女性側により親和的であるという価値観をもたらした。そして「恋愛の女性化」とも言うべきこうした認識は、桂月の言葉にあるとおり、男性を恋愛から遠ざける作用、言うなれば「男性の脱恋愛化」も促すことになる。

では桂月のこのような「恋愛の女性化」「男性の脱恋愛化」の背景には、どのような性別観があったのだろうか。桂月は「男は力、女は愛、生殖の方面より云へば、女は、主任者にして、男は補助者也」「男は、力。女は、愛。男子、たゞまさに、あ

明治期における学生男色イメージの変容

くまでも、力を伸ばすべし。その力を伸ばすべきは、家庭にあらずして、社会にあり、山野にあり、大海にあり」「子女の教育は、女性の本職也。従つて、家庭は、女性活動の天地也」などくり返し述べている。(大町 1908, p. 11, 大町 1906a, p. 7, 大町 1906b, p. 3)。このように桂月の性別観には、生殖や子女の教育、あるいは家庭の経営などを女性の役割とし、社会における活動を男性の本分とする、近代的な性別役割分業の価値観が色濃く反映していた。

巖本善治はすでに1888年の時点で、「左れば男子外に出で、働らき、女子内を守りて家を齋ふるは、正に至当の分労たり、之れ天の命ずる所ろにして、永遠相違あるべからず」と記している(巖本1888c, p. 2)。巖本はこのような「男は外、女は内」という性別役割分業を持論とし、自ら編集する『女学雑誌』誌上で同様の主張をくり返し掲載していた。このような性別役割分業は、巖本以後多くの言説へと受け継がれ、近代的な家庭イメージの主要な構成要素となっていくことになる。

そしてこのような、近代的な家庭イメージが知識人の間で共有され、また女学生の登場により男子学生にとっても「家庭」がより身近に想像しうる存在となった1900年代に、家庭における男性の位置付けの微妙さが表面化してくることになるのであった。すなわち、家庭においては「一家団欒」「家庭の和楽」が追及すべき価値とされながらも、近代的な「男は外、女は内」という性別役割分業により、家庭内の親密な心的交流の責任者・担当者の地位は女性側に与えられる。その結果、男性は「家庭の和楽」を構成する一員でありながら、本来の居場所は家庭の「外」すなわち公的領域であるとされるのである⁽⁴⁾。すでに引用した「和楽なる家庭は、実に男子に取りては、鳩毒也」という桂月の言葉には、こうした家庭における男性の矛盾した位置取りが、端的に表現されていると言えるであろう(もちろんこれは実際には、「小さな幸福(家庭)を顧みずに、大きな事業へ挑戦する男性像」への、ずいぶんと自分勝手な陶醉であるのだが)。

このような状況の中で「男性の脱恋愛化」言説は、「恋愛」や「恋愛-結婚-家庭」幸福イメージを受容しようとするか/排斥しようとするかで、男子学生の二分化を促すことになった。「硬派/軟派」の語の正確な定義は時代や地域によって微妙な差異を含んでいるが、これ以降、前節で示唆したような「恋愛受容派=軟派」「恋愛排斥派=硬派」という分類が主流になっていったと考えられる。

では、「恋愛排斥派」である硬派学生たちの男同士の親密な関係は、何と表現されたのか。桂月の文章を更に追うと、以前の硬派学生たちの理想であった「対等な男同士の関係」としての男色イメージの残滓を見ることが出来る。

桂月は1907年刊行の『青年と煩悶』の中で、恋愛のテーマに触れ「東洋の男色、西洋のソドミー、これが肉体的ならば、大に不可なれども之を精神的にすれば、十分に女性に代用するに足る也」と述べる。だがその直後に「男性同士の性霊の抱合」とは「朋友の道」のことであると説明しているのである（大町 1907a, pp. 138-139）。

桂月は、他の文章でもくり返し、「精霊の抱合」すなわち精神的な深い交流について、異性間よりも同性間の交流を高く評価することで、学生時代の異性との恋愛を排斥しようとする論理を組み立てている。だが同時に「男性間の精霊の抱合、こゝに親友となり、莫逆の友となり、刎頸の友となり、管鮑の交となる」というように、やはりこの男性間の関係性は「親友」「刎頸の友」といった言葉で語られ、あくまで恋愛とは別の関係・感情であるとされるのである（大町 1907b, p. 8）。

また桂月は、男性同士の朋友・親友関係を徹底的に賛美すると同時に、「これ普通、女には見るべからざる所にして、男とても、神経質の、女みたやうな人では出来ざる所也」と、真の親友関係は男性間にのみ存在する、という特権化を行う（大町 1907b, p. 3）。ではなぜ、桂月の認識では朋友・親友関係は男性間のみ占有されるのだろうか。実はこの認識の背景にもやはり、近代的性別役割分業観が強く影響している。桂月は「青年時代にいたりては、色欲生ずると共に、男女ともに異性を恋ふれども、女の方は、依然として母を恋ふ。男は、独立の氣象を有して、さまで親を恋はず、その代りに友を求むる也。年老ゆるに従ひて、女は子を恋ふ。男は子を恋ひざるにあらざれども、依然として、友を恋ふるの情切也」と、男性のほうが女性よりも友人を求める傾向が強いと主張する。そしてその理由として「男女にかゝる差異あるは、男は外に働き、女は内に働く境遇より、自然に起りたるものなるべし。はじめは、後天的なりしも、時代を経るに従ひ、終に先天的となりしかを思はるゝ也」と続けるのである（大町 1907b, pp. 1-2）。

このような「男は外（社会）、女は内（家庭）」という領域分担は、実際には男性による外（社会）の独占である。そしてこの外の世界すなわち社会において結ばれる紐帯の相手こそ「朋友」「親友」と呼ばれるものであり、必然的に「友情」は男性の占有物とされる⁽⁵⁾。「内にのみ活動する女子は、自然に友を恋ふるの情は、うすきもの也」という桂月の言葉は、こうした認識をよく表している（大町 1907b, p. 2）。

女性の分担領域である「家庭」が、愛に満ちた空間とされたのに対し、男性の分担領域である「社会」で結ばれる男性同士の紐帯は、女性化された語である「愛」ではなく、「友」という語で表現された。「男は力、女は愛」という桂月の語法に従

明治期における学生男色イメージの変容

えば、家庭領域内部の概念である「愛」は、社会で出会う男性同士の関係には用いられるはずのない言葉だったのである。

5. おわりに

最後に、本稿で明らかになった学生男色イメージの歴史的変容とその背景を、簡潔にまとめておこう。女学生の急増した1900年代以降、男子学生同士の親密な関係は、軟派学生たちを中心とする「男同士の恋」と、硬派学生たちを中心とする「男の友情」の二つの異なるパターンで認識されるようになった。だがこのうち前者は、あくまで異性間の恋愛感情の代替物と位置付けられ、後者は「恋愛」とは異なるものとして無害化されていた。「男子学生同士の親密な関係」としての学生男色という表象は、いずれにしてもヘテロセクシズムから逸脱しない形態へと、解体されていたのである。

もちろん、以上のような分析は、あくまで図式的に示されたものであり、実際には学生男色に関しては、より多くの認識が入り混じった状態であったと考えられる。また、1900年代に上記のような変容が起こったとはいえ、学生男色がこの時期に完全に消滅したわけではない。むしろ1900年頃から徐々に、地域差や学校差を伴いながら、学生男色のイメージは変容していったと考えるべきだろう。特に本稿では当時の知識人の言説分析などを中心としたため、当時の学生たち自身が「男女学生交際」の登場や学生男色イメージの変遷をどのように受け止めていたのかについては、文学作品や自叙伝など一部の史料を検証するにとどまったという限界を有している。この点については、今後さらなる検証が必要であると言えよう。

しかしいずれにしても、従来の学生男色を強く支えていた価値観が、本稿で述べたような変容によって切り崩されていったのは確かである。従来の研究は、一部の男子学生の間で強く支持され肯定的に評価されていた学生男色が、ある時期からその支持を失い衰退していった理由を、1920年代に流行する通俗的な性科学(性欲学)の流行や「同性愛」概念の登場に求めてきた(古川 1994, Pflugfelder 1999)。しかし先行研究では見逃されてきたが、本稿で明らかになったような学生男色イメージ自体の変化も、男子学生の間で学生男色が支持されなくなっていった大きな理由であると考えられる。性科学(性欲学)が流行し、同性愛を「変態性欲」とする言説が噴出するのは、1910年代に入ってからである⁽⁶⁾。だが、すでに1900年代の後半には、学生男色の基盤は大きく侵食され始めていた。学生男色イメージの歴史的変容の結果、学生男色を強く支えるイデオロギーは、もはや硬派の中にも軟派の中に

も、存在しなくなっていたのである。

〈注〉

- (1) 1882年施行の旧刑法において「鶏姦」に対する処罰規定が盛り込まれなかったのは、ボアソナードによる強い反対があったためである。ボアソナードは「法律上の不体裁を避ける」「鶏姦を犯した者は、法律によらずとも人民間において十分な社会的制裁を受けるため、刑法で処罰対象とする必要はない」などの理由で鶏姦規定の存続に反対し、日本側もこれを受け入れたことが、『日本刑法草案会議筆記』に記録されている（早稲田大学鶴田文書研究会 1977, p. 2044）。
- (2) 『キタ・セクスアリス』は1862年生まれの鷗外が、自身の学生時代を振り返り1909年に執筆した自伝的小説であり、ほぼ同時代の姿を描いた『当世書生気質』に比べ、より大きなバイアスを有しているであろうことは言を俟たない。また同時に、筆者の鷗外自身が「性欲」概念の成立にも深く関わった医学者・衛生学者であることから生じるバイアスも存在するはずである。従ってこの作品を、1870年代の学生男色の実態を描いた史料として全面的に信用することは危険である。だが、19世紀後半の一部の男子学生の中に、学生男色を肯定的に評価する価値観が存在したことを証明する史料の一つには十分なるであろう。
- (3) なお正岡はこの記事の中で、男女学生の「恋愛」について「如何にして壮健なる人間を造るべきか」「人種の改良」などの語句を用い、「恋愛→結婚→次世代再生産」という経路を前提とした優生学的主張を行っている（正岡 1906, pp. 111-112）。「恋愛結婚」と優生学の親和性については加藤（2004）に詳しいが、ここでは1906年の時点で、中学生を対象とする雑誌上にこのような主張が述べられていることが注目されよう。
- (4) 海妻（2004）によれば、父親による母親の子育てへの精神的な援助や軽い家事・育児分担を主張する「良夫賢父」論が、近代日本において初めて登場するのも、まさにこの1900年代半ばであった。海妻はこの「良夫賢父」論の登場を、従来の男性側ジェンダー規範への疑義として捉えている。そうであるとすれば、この「良夫賢父」論の登場もまた、本稿で述べたような「家庭における男性の位置付けの微妙さ」が表面化したことへの一つの反応であると考えられることもできよう。
- (5) 桂月自身はこれらの文章中、「友情」という語を直接は使用していないが、「朋友」「親友」間の精神的な深い交流を指す語として、本稿ではこの語を用いる。
- (6) 例えば羽太鋭治・澤田順次郎『変態性慾論 同性愛と色情狂』春陽堂 は1915

年初版発行である。

<文献>

- 安部磯雄, 1905, 「男女学生交際論」『中央公論』1905年11月号, pp. 9-13.
- 太宰治, 1947, 「思い出」『晩年』新潮文庫, pp. 26-70, 初出1933.
- 古川誠, 1994, 「セクシュアリティの変容: 近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』No.17, pp. 29-55.
- 長谷川天溪, 1909, 「文相の文士招待」『太陽』1909年2月号, pp. 155-157.
- 平岩通夫, 1971, 「在りし時代の寄宿舎生活」『七十周年記念誌』東京都立立川高等学校, pp. 66-70.
- 本田和子, 1990, 『女学生の系譜』青土社。
- 堀田正忠, 1883, 『刑法釈義 第三編第四編』須原鉄二発兌。
- 巖本善治, 1888a, 「日本の家族(第一) 一家の和楽団欒」『女学雑誌』第96号(1888年2月11日号), pp. 1-4.
- , 1888b, 「日本の家族(第六) 家族幸福の大根底」『女学雑誌』第101号(1888年3月17日号), pp. 1-5.
- , 1888c, 「日本の家族(第七) 一家族の女王」『女学雑誌』第102号(1888年3月24日号), pp. 1-5.
- 巖谷小波, 1909, 「男色の弁解」『中央公論』1909年3月号, p. 75.
- 海妻径子, 2004, 『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』作品社。
- 菅野聡美, 2001, 『消費される恋愛論 大正知識人と性』青弓社。
- 加藤秀一, 2004, 『<恋愛結婚>は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』ちくま新書。
- 北村透谷, 1892, 「厭世詩家と女性(上)」『女学雑誌』第303号(1892年2月6日号), pp. 4-8.
- 前田愛, 1989, 「『賤のおだまき』考——『キタ・セクスアリス』の少年愛——」『前田愛著作集 第二巻』筑摩書房, pp. 321-328, 初出1975.
- 正岡芸陽, 1906, 「男女学生と恋愛」『中学世界』1906年5月号, pp. 110-115.
- 文部省, 1972, 『学制百年史 資料編』帝国地方行政学会。
- 森鷗外, 1972, 「キタ・セクスアリス」『鷗外全集 第五巻』岩波書店, pp. 83-179, 初出1909.
- 中村隆文, 2006, 『男女交際進化論 「情交」か「肉交」か』集英社新書。

- 大町桂月, 1906a, 「評論 遮莫家郷憶遠征」『中学世界』1906年3月号, pp. 6-7.
- , 1906b, 「評論 男性と女性」『中学世界』1906年11月号, pp. 1-5.
- , 1907a, 『青年と煩悶』参文社。
- , 1907b, 「評論 朋友論」『中学世界』1907年5月号, pp. 1-8.
- , 1908, 『青年時代』大倉書店。
- Pflugfelder, Gregory, 1999, *Cartographies of Desire: Male-Male Sexuality in Japanese Discourse, 1600-1950*, University of California Press.
- 里見弴, 1973, 「君と私と」『明治文学全集76 初期白樺派文学集』筑摩書房, pp. 210-263, 初出1913。
- , 1983, 「私の履歴書」『私の履歴書 文化人1』日本経済新聞社, pp. 7-36, 初出1956。
- 渋谷知美, 1999, 「『学生風紀問題』報道にみる青少年のセクシュアリティの問題化」『教育社会学研究』第65集, pp. 25-47.
- 高柴女史, 1906, 「新女性より見たる男学生」『中学世界』1906年2月号, pp. 23-27.
- 田岡嶺雲, 1905, 「所謂恋愛小説と家庭劇 (其流行の原因)」『天鼓』第5号 (1905年6月1日号), pp. 4-5.
- 天囚居士, 1891, 「薩摩心中」『都の花』57号, pp. 61-82.
- 富安風生, 1983, 「私の履歴書」『私の履歴書 文化人2』日本経済新聞社, pp. 7-70, 初出1961。
- 坪内逍遙, 1969, 「当世書生氣質」『明治文学全集16 坪内逍遙集』筑摩書房, pp. 59-163, 初出1885-1886。
- 氏家幹人, 1995, 『武士道とエロス』講談社現代新書。
- 浮田和民, 1906, 「男女交際に就て」『中央公論』1906年4月号附録, pp. 1-3.
- 早稲田大学鶴田文書研究会・早稲田大学編, 1977, 『早稲田大学図書館資料叢刊 1 日本刑法草案会議筆記 第三分冊』早稲田大学出版部。
- 山本敏子, 1991, 「日本における〈近代家族〉の誕生——明治期ジャーナリズムにおける『一家團欒』像の形成を手掛りに——」『日本の教育史学』34号, pp. 82-96.
- 作者不明, 1885, 『賤のおだまき』市村丁四郎刊。

ABSTRACT

Changes in Images of Homoeroticism between Male Students in the Meiji Era: Focusing on the Emergence of Female Students

MAEKAWA, Naoya

(Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)

Yoshida-nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto, 606-8316 Japan

E-mail: ketsuronkaraiuto@ybb.ne.jp

This paper elucidates historical changes in the images of homoeroticism between male students in the Meiji Era and examines the factors behind this change.

During the Meiji Era, intellectuals subscribed to a morality that prohibited homosexuality. However, some male students, known as *kouha* (solid students), shared common values that placed a positive value on homoeroticism between male students. They loathed falling victim to women's charms, and aspired to develop ideal relations between themselves and other elite male students.

In the 1900s, the number of girls attending school increased markedly, and the presence of female students increased. These women came to be seen as suitable love or marriage partners for male students. In modern Japan, the emergence of female students helped to form the ideology of romantic love and a new positive image composed of love, marriage, and family.

These changes brought about by the emergence of female students had an impact on the images of homoeroticism between male students. After the 1900s, a form of homoeroticism called "love between men" became popular among the *nampa* (soft students), and the *kouha* students lost their monopoly on homoeroticism. However, "love between men" was just a substitute for love between men and women. On the other hand, the *kouha* students strengthened their belief that they should avoid falling in love, as they thought it was too feminine. Therefore, they called close relations between men "friendships between men," avoiding the use of the word "love." In this way, homoeroticism between male students was separated into "love between men," as an imitation, and "friendship between men." Homoeroticism between male students was transformed into a form adapted to heterosexism.